

不退転

第 134 号
東江中学校
校長 神元 勉

■中学生人権作文コンテスト沖縄県大会「優秀賞」
「笑顔が奪われない世界」

三年 前田 愛菜

人権とは、すべての人が生まれながら平等に持ち、保障されなくてはならない権利です。この権利があることで、一人ひとりの個性がかけがえのないものとして大切にされ、尊敬をもって人間らしく扱われることが保障されているのです。

ところが、この人権が全く無視されているという問題が起きています。それは、児童虐待問題です。沖縄県でも実の両親から虐待を受けていた幼い子ども達の事件がありました。すべての人が生まれながら平等に持っている人権を、自分の両親によって奪われるなんて、あまりにもひどすぎると思います。せっかくこの世界に生まれてきたのに、その誕生を一番喜んで大切に守ってくれるはずの親が、守ることもせず、虐待というひどい行為をするなんて、私は信じられません。それに、どうしてそんなひどいことができるのか、理解できません。



私が中学二年生の時、職場体験で保育園に行きました。0歳から6歳までの子ども達は、みんな可愛くて元気で、いつもニコニコしていました。初めての環境の中で過ごすことは不安でした

が、子ども達の輝く笑顔に励まされて頑張れたところが、たくさんあったと思います。毎日お母さんに抱っこされたり、手をつないで保育園に通ったり、お母さんが恋しくて泣いたりする子ども達。そして、帰る時にもお母さんたちが迎えに来てくれて、今日一日の出来事を楽しそうにしゃべりながら、笑顔で帰る姿がありました。子ども達にとって、自分をしっかりと守ってくれる親の存在は、子ども達に安心感を与え、明るく元気に伸び伸びと過ごすことができ、心の支えになっているんだと思いました。

児童虐待の事件が起きた時、保育園で一緒に過ごした子ども達の笑顔を思い出しました。この世界に生まれてきて、まだ一〜五年しか生きていない子ども達。でも、保育園で出会った子ども達は、楽しいことや嬉しいことをたくさん経験してきています。もちろん、しかられたり、友達とケンカをしたりして、涙を流すことも経験するはずですが、でも、それは成長していくために必要な悲しいことや辛さだと思っています。それに比べ、虐待によって受ける心や体の傷は、想像もできないほどの痛みを伴っているはず。一番居心地がよく安心できる家の中で、安らぐことができない。そんなかわいそうな子ども達がいることも、全て現実なのです。

もし、自分の子どもがケガをしたり、病気になったりしたらどうするだろう、どんな気持ちになるだろう、と考えてみました。考えただけで悲しい気持ちになってしまうし、いつも元気で笑っていてほしいと思います。中学生の私でも、こんな気持ちになってしまうのに、自分の本当の子どもを虐待するなんて、信じられません。そんなひどいことをする大人には、子どもを育てる資格なんてないと思います

た。

すべての人が生まれながらに持ち、保障されなければならぬ人権ですが、赤ちゃんや子ども達は、その権利を守ってくれる大人がまわりにいなければ、権利を権利として自分のものにできないのだと思います。自分を大切にしてくれる大人がまわりにいることが、とても大事なことでと思います。そして、自分を大切にしてくれる人たちがいれば、自分の中にも、人を大切にできる心が生まれてくるはず。虐待する親たちは、自分たちもそんな扱いを受けて大人になったのでしょうか。ただ子どもに八つ当たりをしているだけでしょうか。もしそうなら、自分の子どもには、自分と同じ苦しみを味わうようなことをさせたくない、とは思わないのでしょうか。それとも、大切にされたことがないから、大切にすることということがわからないのでしょうか。

一人ひとりが、かけがえのない存在として生きていくためには、一人ひとりが、命の大切さを考えなければならぬと思います。自分の命の大切さがわかれば、まわりの人たちを大切に、優しくすることができると思います。

世界中の子ども達の笑顔が自分の親によって奪われないよう、たくさんの方が命の大切さ、子どもにとって親がどれほど大切な存在なのかを知っていてほしいです。この世界から「虐待」という言葉がなくなり、平和な世界になることを願っています。

世界エイズデー・世界人権デー・人権週間・赤い羽根共同募金などの取組を通して、いじめ・暴力・差別や偏見・思いやり(助け合い)の心や命の尊さを深く考える絶好のチャンスです。

『東江中学校人権宣言』の取組と合わせて、12月には、人権を考える月間にしたいです。